

TOKYO MET
SaLaD
MUSIC FESTIVAL
2024 [サラダ音楽祭]

REPORT

2024年9月14日(土)、15日(日) 会場：東京芸術劇場／池袋エリア

TOKYO MET SaLaD MUSIC FESTIVAL 2024 [サラダ音楽祭] (スーパーバイザー／大野和士) のメインプログラムを9月14・15日の2日間にわたり東京芸術劇場および池袋エリアで開催し、延べ13,000人以上の方にご来場いただきました。



サラダ音楽祭メインプログラム開催レポート

サラダ音楽祭は、東京都と東京都交響楽団が中心となり、2018年に誕生しました。サラダ=SaLaDの由来であるSing and Listen and Dance!! ～ 歌う！聴く！踊る！をコンセプトに、フレッシュで多彩なプログラムを展開しています。

主催：TOKYO MET SaLaD MUSIC FESTIVAL [サラダ音楽祭] 実行委員会
(東京都、公益財団法人東京都交響楽団、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場、豊島区、三菱地所株式会社)

協賛：東武鉄道株式会社



三菱地所株式会社



広報協力：東京地下鉄株式会社、東日本旅客鉄道株式会社

企画・制作協力：ヤマハ株式会社

メディア・パートナー：東京メトロポリタンテレビジョン株式会社

オフィシャル チケットリング パートナー：ぴあ株式会社

OK！オーケストラ～0歳から入場OK！

「OK！オーケストラ」は、0歳から入場OKのコンサート。音楽に合わせて歌ったり、踊ったり、客席には親子の笑顔があふれました。子ども向け番組でもお馴染みの小林顕作が司会を務め、子どもも大人も楽しめる多彩なプログラムをお届けしました。



9月14日 11:00 / 15:00
東京芸術劇場 コンサートホール
指揮／大野和士
司会／小林顕作
ダンス・振付／近藤良平
ダンス／コンドルズ
児童合唱／東京少年少女合唱隊
合唱指揮／長谷川久恵

東京少年少女合唱隊、客席の皆さんと声を合わせて歌いました



指揮体験コーナーでは都響メンバーも思わず笑顔に



近藤良平率いるコンドルズと一緒にダンス！



客席の一部には、抱きかかえることで音楽を視覚と触覚で感じられる「サウンドハグ™」を導入。新たな音楽体験の可能性を提供しました



ベビーカーのお客様もたくさんご来場いただきました

音楽祭メインコンサート

“オーケストラ×歌×ダンス”で魅せる特別なコンサート。世界的ダンスカンパニー Noism Company Niigata（芸術総監督／金森 稔）との共演による《ボレロ》、新国立劇場合唱団とソリストを迎えたラター 《マニフィカト》など、大野和士×都響と共に贅沢なコラボレーションが実現、メインプログラムのフィナーレを飾りました。

9月15日 15:00

東京芸術劇場 コンサートホール

指揮／大野和士 ソプラノ／前川依子 合唱／新国立劇場合唱団 合唱指揮／水戸博之
ダンス／Noism Company Niigata 演出・振付／金森 稔



ウクライナ避難民の方々 90名をご招待。
希望を込めたメッセージをお届けしました

子どものためのオペラ『アトランティス・コード』～伝説の島の謎～ (日本語上演)

伝説の島アトランティスの謎が隠された本を手に入れた少年と母の物語を、子どもにも分かりやすい語りかけで、大人も考えさせられるような内容の本格的なオペラとして上演しました。歌手3名と小編成オーケストラの紡ぐ世界観に子どもたちが引き込まれ、終演後のロビーでは親子で感想を語り合う場面も見られました。なお、視覚に障害のあるお客様のための舞台説明会を実施しました。



9月14日 14:00

9月15日 14:00

東京芸術劇場 シアターイースト

指揮／齋藤友香理 演出・台本翻訳／菅尾 友

サトシ／西山詩苑 サトコ／柳原由香

モエコ&グラツイエツラ／松原みなみ

警察官&ニュースキャスター（声の出演）／田中秀孝

ヴァイオリン／福崎雄也 ヴィオラ／阿部 哲

チェロ／金子鈴木 ハープ／宮本あゆみ

打楽器／永野仁美

SaLaD ミニコンサート

池袋の街なかで気軽に楽しめるSaLaDミニコンサートを開催！ 都響弦楽四重奏をはじめ、新国立劇場合唱団声楽アンサンブル、芸劇オーケストラ・アカデミー・フォー・ウィンドのメンバーが出演し計5ヶ所で数々の名曲をお贈りしました。



- GLOBAL RING THEATRE
(池袋西口公園野外劇場)
- 東京芸術劇場 ローア広場(B1F)

- メトロポリタンプラザビル 1F自由通路
- ホテルメトロポリタン 1Fロビー
- WACCA池袋 1F STAGE

SaLaD ワークショップ

「Sing and Listen and Dance !! ～歌う！聴く！踊る！」をテーマに、子どもから大人まで、障害のある方も参加・体験できるプログラムを、各分野の一線で活躍するアーティストから本物の学びを体験できる場として、多彩なワークショップを展開しました。

- 鳴らしてみよう！TOUCH & TRY(楽器体験)
(企画・制作協力：ヤマハ株式会社)
- 都響メンバーの演奏でテレビ番組制作を体験しよう「TOKYO MX ブース」
- よい声で歌うためのワークショップ
- コンドルズとLet'sダンス！
- ～ムラバヤシケンジの楽器づくりワークショップ～
指ではじいて、心もはずむ 手のひらに乗るピアノ「カリンバ」を作ろう！



クラリネット、フルート、ヴァイオリンの楽器体験



コンドルズと身体いっぱい、のびのびとダンス



都響メンバーの演奏をカメラに収め、テレビ番組制作を体験できる「TOKYO MXブース」



新国立劇場合唱団メンバーがよい声で歌うためのコツをレクチャー



木彫りアーティストのムラバヤシケンジと自分だけのカリンバを作り、演奏しました

都響メンバーと Let's 弦楽アンサンブル

アマチュアからプロを目指す方まで、世代や習熟度を問わず都響メンバーから指導を受け、一緒に演奏できるLet's弦楽アンサンブル。3日間の練習期間を経て、東京芸術劇場ロワー広場で成果発表会を実施しました。

都響メンバーが
参加者にインタビュー



都響メンバーによる 「サラダ音楽祭マスタークラス」

管楽器アンサンブルのマスタークラスを今回新たに開講しました。都響メンバーが講師となり、一般公募の演奏グループにアンサンブル技術を高めるための本格的なレッスンを実施しました。



ボレロ de 影あそび

スクリーンの中の音符をあなたの影がはじくと、ラヴェル《ボレロ》の楽譜から生まれた音の粒が、ポロンポロンとピアノから鳴りだします。ステージの上で、踊るように自由に身体を動かしながら、影あそびで不思議な音の世界をお届けしました。
(企画・制作協力：ヤマハ株式会社)

ボレロ de
影あそび



併設展示：都響の「ボレロ」ソロ/タッチパネルに触れると都響メンバーによる「ボレロ」の各パートのソロ演奏が流れます

併設展示：楽器の
積み木/楽器の未
利用材を活用した
積み木コーナー



併設展示：コースター作り/ギターのサウンドホール
の端材でオリジナルのコースターを作成

Tabita BERGLUND

Conductor

タビタ・ベルグランド
指揮

©Nikolaj Lund

2024/25シーズンからデトロイト響首席客演指揮者を務め、2025/26シーズンからドレスデン・フィル首席客演指揮者に就任予定。

これまでにダラス響、スウェーデン放送響、フィンランド放送響、フィルハーモニア管、リヨン国立管、ベルゲン・フィル、ベルン響、バーミンガム市響、BBCスコティッシュ響、デュッセルドルフ響などを指揮。2024年夏、『フィガロの結婚』でガーシントン・オペラ（英国）へのデビューを果たした。2023/24シーズンの終わりまで、クリスティアンサン響（ノルウェー）首席客演指揮者として3年の任期を務めた。2024/25シーズンは、ヒューストン響、ミネソタ管、イェーテボリ響、ケルン・ギュルツェニヒ管、パリ室内管、ポーランド国立放送響、アイスランド響、ラハティ響などへデビュー。2024年12月、ノルウェー国立バレエで《くるみ割り人形》を指揮する。

ノルウェー音楽アカデミーでトルルス・モルクにチェロを、オーレ・クリスティアン・ルーデに指揮を学んだ。オスロ・フィルやベルゲン・フィル、トロンハイム・ソロイストなどで演奏活動をした後、指揮に専念。今回の都響への登壇が指揮者としての本格的な日本デビューとなる。

This season, Tabita Berglund begins her four-year tenure as Principal Guest Conductor of Detroit Symphony, and from 2025/26 she holds the same title with Dresdner Philharmonie. Recent engagements include Dallas Symphony, Detroit Symphony, Swedish Radio Symphony, Finnish Radio Symphony, Philharmonia Orchestra, Orchestre national de Lyon, Bergen Philharmonic, Berner Symphonieorchester, City of Birmingham Symphony, BBC Scottish Symphony, and Düsseldorfer Symphoniker, among many others. Berglund made her Garsington Opera debut in Summer 2024 conducting *Le nozze di Figaro*. She concluded her three-year tenure as Principal Guest Conductor of Kristiansand Symphony at the end of 2023/24. Berglund studied at Norwegian Academy of Music, first as a cellist with Truls Mørk and later orchestral conducting with Ole Kristian Ruud. She played regularly with Oslo and Bergen Philharmonic as well as Trondheim Soloists before conducting became her main focus.



プロムナードコンサートNo.410

Promenade Concert No.410

サントリーホール

2024年11月3日(日・祝) 14:00開演

Sun. 3 November 2024, 14:00 at Suntory Hall

指揮 ● タビタ・ベルグランド Tabita BERGLUND, Conductor

ピアノ ● ホーヴァル・ギムセ Håvard GIMSE, Piano

コンサートマスター ● 山本友重 Tomoshige YAMAMOTO, Concertmaster

シベリウス：交響的幻想曲《ポヒョラの娘》 op.49 (14分)

Sibelius: *Pohjola's Daughter*, op.49

グリーグ：ピアノ協奏曲 イ短調 op.16 (30分)

Grieg: Piano Concerto in A minor, op.16

I Allegro molto moderato

II Adagio

III Allegro moderato molto e marcato

休憩 / Intermission (20分)


ムソルグスキー（ラヴェル編曲）：組曲《展覧会の絵》 (35分)

Mussorgsky (arr. by Ravel): *Pictures at an Exhibition*

プロムナード～グノームス～プロムナード～古城～プロムナード～テュイルリー～ブイドロ～プロムナード～殻をつけた雛の踊り～ザムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ～リモージュの市場～カタコンベ、ローマ人の墓地～死者とともに死せる言葉で～鶏の足の上に立つ小屋～キエフ（キーウ）の大門

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

助成： 文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術等総合支援事業 (公演創造活動))
独立行政法人日本芸術文化振興会

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

ヤングシート対象公演(青少年と保護者をご招待)

協賛企業・団体はP.55、募集はP.58をご覧ください。





Håvard GIMSE

Piano

ホーヴァル・ギムセ

ピアノ

オスロ近郊の街コングスヴィンゲル生まれ(今も名誉市民として在住)。ザルツブルク・モーツァルテウム音楽院とベルリン芸術大学でハンス・ライグラフィに師事、イジー・フリンカのもとで研鑽を積んだ。1987年、フランクフルトの若手音楽家コンクール第1位。スタインウェイ賞、グリーグ賞、シベリウス賞、ノルウェー批評家賞、リンデマン賞など数多くの賞に輝いている。

これまでに、スカンジナビアの主要オーケストラをはじめ、ボルティモア響、アトランタ響、バーミンガム市響、ロイヤル・フィル、ロイヤル・リヴァプール・フィル、ハレ管、プラハ響、ベルリン・コンツェルトハウス管、hr響(フランクフルト放送響)などと共演。またウィグモアホール、カーネギーホール、アムステルダム・コンセルトヘボウ、ベルリン・コンツェルトハウスなどに出演した。ソニー・クラシカル、シャンドス、ナクソス、アルファ・クラシックスなどで録音も多く、ディアパゾン・ドールや『グラモフォン』誌エディターズ・チョイスなどに選ばれている。1990年代後半から、ノルウェー音楽アカデミー(オスロ)でピアノと室内楽の非常勤教授を務めている。

Håvard Gimse is now an honorary citizen of the little town of Kongsvinger (east of Oslo) where he was born and now lives. He studied at Mozarteum Salzburg and Hochschule der Künste Berlin with Hans Leygraf. His latest teacher has been Jiri Hlinka. He won the 1st prize at Jugend Musiziert Competition in Frankfurt in 1987. Håvard won Steinway Prize, Grieg Prize, Sibelius Prize, Norwegian Critics Prize, and Lindeman Prize. He has performed with nearly all the major Scandinavian orchestras, Baltimore Symphony, Atlanta Symphony, City of Birmingham Symphony, Royal Philharmonic, Royal Liverpool Philharmonic, Hallè Orchestra, Prague Symphony, Konzerthausorchester Berlin, and hr-Sinfonieorchester (Frankfurt Radio Symphony). Håvard has received Diapason d'Or and Gramophone's Editor's Choice. His playing is to be heard on recording labels like Sony Classical, Chandos, Naxos, and Alpha-Classics. Håvard has since the late nineties been a part-time Professor of Piano and chamber music at Norwegian Academy of Music in Oslo.

シベリウス： 交響的幻想曲《ポヒョラの娘》 op.49

ジャン・シベリウス(1865～1957)の交響的幻想曲《ポヒョラの娘》(1906)は、作曲者の様式発展において重要な転換点となった作品である。交響曲第2番(1902)と第3番(1907)の間に創作された《ポヒョラの娘》は、シベリウスが曲の出版に際して楽譜に「交響的幻想曲」と記した唯一の管弦楽曲でもある。この作品に着手した当時のシベリウスは、清澄な古典主義的傾向へと作風の質的变化が見られるようになっていた。重厚な民族ロマン主義から距離を置き、より明快に、自由に、そして軽やかに飛翔する——作風の過渡期にあったシベリウスが「交響的幻想曲」という名称に込めたのは、そのようなアイデアだった。

この作品のタイトルに関しては、興味深いエピソードがある。《ポヒョラの娘》の題材はフィンランドの民族叙事詩『カレワラ』第8章に基づいており、北国ポヒョラの美しい娘に一目惚れして求愛した英雄ヴァイナモイネンの冒険と失敗を描いたもの。シベリウスは当初、曲名を《フィンランドの民族叙事詩『カレワラ』に基づく交響的幻想曲》としていたが、ドイツの出版社リーナウがその味気ないタイトルに不満を示し、《ポヒョラの娘》を提案する。それに納得しなかったシベリウスは、《ヴァイナモイネン》という雄々しい曲名ではどうだろう、とリーナウ社に再提案。しかし、その不可解なフィンランド語のタイトルにもリーナウ社が強く反発したため、シベリウスはやむをえず曲名を《英雄の冒険》へともう一度修正する。この変更は、1905年にシベリウスがベルリンで聴いたりヒャルト・シュトラウス(1864～1949)の交響詩《英雄の生涯》(1898)の影響もあるだろう。確かに《ポヒョラの娘》の華麗で色彩豊かな響きの内に、同世代の偉大な作曲家の影を見ることも可能だ。ところがリーナウ社がその案にも難色を示したことから、結局、出版社の要望に従って《ポヒョラの娘》というフェミニンなタイトルが採用された。

《ポヒョラの娘》の初演は1906年12月29日、ロシアの音楽家アレクサンドル・ジロティ(1863～1945)の招待によりサンクトペテルブルクのマリンスキー劇場で行われ、大成功を収めた。曲全体の構成はソナタ形式の様相を呈するが、提示部で主調の変ロ長調が確立されるまでの緻密な設計、明確な確立を拒否する第2主題、そして何よりも再現部における各主題の力強い展開処理などに、ソナタ様式を自在に操るシベリウス独自の手法が見られる。伝統的な形式原理を踏まえながらも、固定観念にとらわれないファンタジックな構成の内に、作曲者が「交響的幻想曲」に抱いていた理念の本質を見出すことができるだろう。

(神部 智)

作曲年代：1906年

初 演：1906年12月29日 サンクトペテルブルク マリンスキー劇場 作曲家指揮

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、コルネット2、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、ハープ、弦楽5部

グリーグ： ピアノ協奏曲 イ短調 op.16

古今のピアノ協奏曲でも特に人気の高いこの曲は、北欧ノルウェーが生んだ国民主義作曲家の巨匠、劇音楽《ペール・ギュント》などでも有名なエドヴァール・グリーグ(1843～1907)若き日の傑作だ。

彼はベルゲンで貿易商を営む音楽好きの父と、ドイツやイギリスへ留学してピアニストとしても活躍、文学的な素養も豊かな母とのあいだに生まれた。母の弾くモーツァルトやショパンなどピアノの響きに包まれて育ち、即興詩の朗読にも興味をもち……と、幼くして芸術的なセンスを発揮したグリーグは、少年期から作曲を始めている。

ドイツはライプツィヒに留学し、ピアノと作曲の腕を磨いて帰国した彼は、恋仲だった名家の娘で優れた歌手でもあったニーナ・ハーゲルupp(1845～1935)と(彼女の家の猛反対を押し切って)結婚。質素ながら幸せな新生活が始まったところでグリーグの創作力もいよいよ溢れ出す。生涯にわたって全10集もの《抒情小曲集》にまとめられる小品群も書き始めていたなか、妻にも勧められて1868年のひと夏をかけ取り組んだのが、本日お聴きいただくピアノ協奏曲だ。

1869年4月の初演は大成功。……と、その直前にグリーグのもとへ意外な人から手紙が届いたエピソードも紹介しておこう。全ヨーロッパを席卷した超人ピアニストにして作曲家、フランツ・リスト(1811～86)が、ふとしたことでグリーグの旧作の楽譜を見て才能に感嘆、ぜひ会おうではないか……と招待状を送ってきた。驚いたグリーグは、政府にかけあって給費金をもらい、ローマにいたリストのもとを訪問。会見の前は緊張のあまり気分が悪くなるほどだったグリーグだが、巨匠は青年の作品に大喜び。なんとこの難曲・ピアノ協奏曲を初見で(しかも豪速で)弾きはじめ、「これが真の北欧だ!」と激賞しながら、激情と繊細なニュアンスに富んだ演奏でグリーグを感激させたという。

リストの助言でオーケストレーションを改訂、さらに亡くなる直前にも大改訂を加え、現在の形となった。計画されていた2番目のピアノ協奏曲が遂に書かれなかったのが惜まれる。

第1楽章 アレグロ・モルト・モデラート イ短調 ティンパニの轟きに続いてピアノの強打一閃!という冒頭のインパクト。続く主題も、民謡風の素朴な歌がロマンティックに広がってゆく、という心憎いもの。ピアノ独奏の華麗が駆け出したかと思えば、第2主題の息長い歌が抒情を広げ……。ソナタ形式のなか、優しい歌から豪華な響きまで聴き手を昂らせてやまない。

第2楽章 アダージョ 変ニ長調 冒頭、弱音器をつけた弦楽器の響きから、

しみじみともの柔らかな雰囲気に含まれる緩徐楽章。細やかな装飾も美しいピアノ独奏、その豊かな技巧が、澄んでのびやかな中にも変化を際立たせてゆく。

第3楽章 アレグロ・モデラート・モルト・エ・マルカート イ短調～イ長調
行進曲のようなリズムが軽く聴こえてくると、すぐにピアノが華やかにきらめく。ロンド・ソナタ形式の力強い音楽に、流れ轟くピアノの雄弁な技巧とオーケストラの大胆とが呼び交わし……。途中、雰囲気をがらりと変えて、フルート独奏が息ながく旋律を吹くと、ピアノが（チェロ独奏が低音を隠し味のように響かせながら！）夢みるように応える中間部も印象的。壮大な輝きを放つ終結部まで、聴衆を魅了する。

（山野雄大）

作曲年代：1868年 1907年の最終稿まで幾度も改訂

初 演：1869年4月3日 コペンハーゲン エドムン・ネウペット独奏

楽器編成：フルート2（第2はピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部、独奏ピアノ

ムソルグスキー（ラヴェル編曲）： 組曲《展覧会の絵》

原曲はロシア民族主義を追求した作曲家グループ“力強い仲間たち（五人組）”のひとりモデスト・ムソルグスキー（1839～81）が、1874年に作曲したピアノ曲である。西欧的伝統にこだわらない斬新な語法でもって民族的作風を求めた彼の個性が端的に表れた組曲で、ロシアの美術家ヴィクトル・ガルトマン（1834～73）の絵から靈感を得た作品だ。ガルトマンは1873年に急死し、ムソルグスキーは1874年に開かれた彼の回顧展に出品された絵画やスケッチに触発されて、同年このピアノ組曲を作り上げた。

ロシアの国土や生活を主な題材にした画家ガルトマンは、ロシア芸術の発展という点でムソルグスキーと志を同じくし、たとえ外国に題材をとった場合でも（ムソルグスキーが組曲で取り上げた絵の幾つかもその例）、それをロシアの民衆に重ね合わせて表現するなど、根っからの民族主義者だった。

そうしたガルトマンの絵に触発されただけに（ただし元になった絵が判明していないものもある）、この組曲で打ち出された民族表現は強烈で、例えば第1曲「グノームス」で表現される侏儒（＝こびと）のぎこちない動きや叫びは虐げられたロシア民衆の姿に重なり、ポーランドの牛車を描いたという第4曲「ブイドロ」でもムソルグスキーは農民の苦役に焦点を当てている。一方で第9曲「鶏の足の上に立つ小屋」はロシア民話の世界を迫真的に音化し、終曲「キエフ（キエウ）の大門」ではロシア聖歌の引用や鐘の響きの模写により輝かしくロシアを賛美する。

粗削りともいえる力感溢れる表現法、原色的効果、民謡やロシア語の抑揚に関

連する旋律法やリズム法など、ムソルグスキー特有の民族的語法が存分に発揮されたこの組曲は、同志だった故人に捧げるにまことにふさわしい作品だ。

この友人へのオマージュが、およそ半世紀後の1922年に管弦楽曲として生まれ変わるとは、まさか彼も考えてなかったろう。その立役者は、組曲が成立した頃にこの世に生を受けた2人の音楽家、ロシア出身のコントラバスの名手で名指揮者として知られたセルゲイ・クーセヴィツキー(1874～1951)と、フランスの作曲家モーリス・ラヴェル(1875～1937)だった。クーセヴィツキーは当時パリで指揮者として主宰していた演奏会のために、《展覧会の絵》の管弦楽編曲をラヴェルに依頼したのである。

当時このピアノ組曲は有名といえるほどではなく、出版譜としてはニコライ・リムスキー＝コルサコフ(1844～1908)がムソルグスキーの原曲に手を加えた版が流布していた。善意ゆえではあるが、アカデミックな観点から原曲の大胆な民族的オリジナリティを常套的なものに直してしまっただけで、そこにさらにラヴェルならではの洗練されたセンスによるオーケストレーションと改変が加わって、ラヴェル版《展覧会の絵》は原曲の武骨なロシア的ダイナミズムとはやや趣の異なる、近代オーケストラの機能を存分に生かした色彩感溢れるものとなった。

しかしそれによってムソルグスキーのこの曲は広く知られるようになり、原曲ピアノ版のオリジナルの形での出版(パーヴェル・ラム校訂/1931年)にも繋がることとなる。その後ラヴェル版以外にも、よりムソルグスキーの民族的個性を重視した幾つかの管弦楽編曲版が試みられてきたが、それでもラヴェル版の優位は変わらない。ラヴェル版がいかに管弦楽の効果を十分に発揮したものであるかの証明といえよう。

曲は展覧会場を歩く様子を描く「プロムナード」で始まる。旋法的語法、5拍子と6拍子の混交、単音で力強く開始され和音の動きが応える応唱風の出だしともども、ロシアを印象づける循環主題である。

第1曲「グノームス」は前述のように侏儒が不器用に動く様を表現する。再び「プロムナード」を挟んで、第2曲「古城」は中世の吟遊詩人の物悲しい歌(アルトサクソフォン)。また「プロムナード」が置かれた後、第3曲「テュイルリー」ではパリの公園での子供たちの口喧嘩の情景が軽快に描かれる。第4曲「ブイドロ」については前述した。ただ牛車が遠くから近づくような弱音での開始はラヴェルが元にしたリムスキー＝コルサコフ改変版に基づくもので、ムソルグスキーの原曲はいかにも苦役を表すように強音で始められている。この第4曲の悲劇性を引きずるような、短調の悲しげな調へに変容した「プロムナード」を挟んだ後、一転軽快な第5曲「殻をつけた雛の踊り」が気分の変化を作り出す。第6曲「ザムエル・ゴールドンベルクとシュムイレ」は金持ちのユダヤ人(弦と木管の重々しいユニゾン)と貧しいユダヤ

人(弱音器付きのトランペット)を描いた2枚の絵による音楽。

第7曲「リモージュの市場」で描かれるのは活気ある市場での女たちのお喋り。第8曲「カタコンベ、ローマ人の墓地」は暗い地下の墓地を描き、“死者とともに死せる言葉で”と記されたプロムナード主題へ続く。第9曲「鶉の足の上に立つ小屋」では白に乗って荒々しく進むロシアの魔女ババ・ヤガーが迫真的に表現される。そして最後は、ガルトマンがキエフ街門のために画いた設計図に基づく終曲「キエフ(キーウ)の大門」の壮麗な響きで全曲が閉じられる。

(寺西基之)

作曲年代：原曲／1874年 ラヴェルの編曲／1922年

初 演：ラヴェル版／1922年10月19日 パリ セルゲイ・クーセヴィツキー指揮

楽器編成：フルート3(第2、第3はピッコロ持替)、オーボエ3(第3はイングリッシュホルン持替)、クラリネット2、バスクラリネット、アルトサクソフォン、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ユーフォニアム、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、小太鼓、シロフォン、鞭、チャイム、ガラガラ、タムタム、グロックンシュピール、ハープ2、チェレスタ、弦楽5部

※地名表記について。近年、ウクライナ語の発音に基づく「キーウ」が普及しましたが、《展覧会の絵》終曲のタイトルはロシア語で書かれたため、歴史的呼称として「キエフ」を残し、ここでは「キエフ(キーウ)の大門」としました。(編集部)

Program notes by Robert Markow

Sibelius: *Pohjola's Daughter*, op.49

Jean Siblius: Born in Hämeenlinna (Tavestehus), December 8, 1865; died in Järvenpää, September 20, 1957

Numerous times throughout his life Sibelius was drawn to the Finnish national epic, the *Kalevala*, an immensely fertile repository of myth and legend that gave birth to such Sibelian works as *The Building of the Boat* (an aborted opera), *Kullervo* (an 80-minute symphonic fresco for chorus and orchestra), the four Lemminkäinen *Legends* (one of which is the famous *Swan of Tuonela*) and *Tapiola* (another symphonic poem), among others. *Pohjola's Daughter* dates from 1906, which places it chronologically between the Second and Third Symphonies and shortly after the Violin Concerto. The composer led the first performance in St. Petersburg in December of 1906.

The episode that serves as the music's point of departure concerns the old warrior, sorcerer, and bard Väinämöinen, who is traveling across the wilderness when he meets the Daughter of the Northland (Pohjola is the ancient bardic name for a significant northern locale in the *Kalevala*). Seated on a rainbow while spinning a cloth of gold and silver, she appears as an enchanting vision to Väinämöinen, who ardently tries to seduce the beautiful woman. She sets him a series of impossible tasks (cutting a swan in two with a pointless knife, pulling birch bark from a stone, etc.), all but the last of which he completes. In trying to build a boat from the splinters of her spindle, Väinämöinen wounds himself grievously with his ax, then sadly leaves for home.

Each listener will surely find passages that depict the bewitching maiden, the grim-faced old warrior, his travails, and Finland's vast, primeval forests, but the discourse is musical rather than programmatic, poetic rather than narrative. Sibelius designated *Pohjola's Daughter* a "symphonic fantasy" (Tchaikovsky had done the same with his *Romeo and Juliet* Fantasy) rather than a tone poem or symphonic poem, thus hoping to guide listeners' expectations towards experiencing the expressive character of the story against a background of fluidly evolving sonata form, rather than trying to identify a series of specific events.

Grieg: Piano Concerto in A minor, op.16

- I **Allegro molto moderato**
- II **Adagio**
- III **Allegro moderato molto e marcato**

Edvard Hagerup Grieg: Born in Bergen, June 15, 1843; died there September 4, 1907

It is hardly surprising that Grieg's only large-scale orchestral work is a piano concerto, for, like Chopin, the piano was the instrument central to his compositional output. Grieg's first works were for the piano, written as a teenager, and he wrote all his life for the instrument, including ten volumes of *Lyric Pieces*. The melodic inspiration, wonderful freshness and harmonic piquancy that distinguish these pieces are found as well in the Piano Concerto.

Grieg was the first composer from Norway to achieve international recognition in a big way, and it was his Piano Concerto, written at the age of 25, that brought him his first major success. It was written mostly during the summer months of 1868 while Grieg was spending an idyllic vacation in the town of Søllerød in the Danish countryside. The first performance was given by Edmund Neupert, Norway's leading pianist of the day, on April 3, 1869 at Copenhagen's Royal Theater. The concerto was also dedicated to Neupert.

Musical connoisseurs have long made an exercise of comparing two of the world's most popular piano concertos written in the mid-nineteenth century, Schumann's (1841/1845) and Grieg's. Both concertos open with an orchestral "bang" followed by a cascade of octaves from the soloist, and have for their first themes a plaintive melody played by the woodwind choir. In fact, Grieg modeled his entire first movement on Schumann's.

But Grieg was no mere imitator. The music is deeply imbued with a quality all his own. Building on the stylistic inheritance of the German romantic tradition, Grieg integrates elements of Norwegian folk music as well as individual touches of his own musical personality (fondness for certain intervals, melodic turns of phrase, etc.). The Norwegian elements are most pronounced in the final movement. Here, the principal theme, announced by the piano, conforms to the rhythmic pattern of the *halling* (a national dance), combined with the sound effects suggestive of the Hardanger fiddle (bare fifths, drones, slides to a dissonant pitch). Towards the end of the movement, this *halling* pattern becomes a *springdans* when the theme is played in triple rather than duple meter.

Mussorgsky (arr. Ravel): *Pictures at an Exhibition*

Promenade – Gnomus – Promenade – The Old Castle – Promenade – Tuileries – Bydlo – Promenade – Ballet of the Unhatched Chicks – Samuel Goldenberg and Schmuyle – The Marketplace at Limoges – Catacombs – Cum mortuis in lingua mortua – Baba Yaga's Hut on Chicken Legs – The Great Gate at Kiev (Kyiv)

Modest Mussorgsky: Born in Karevo (renamed Mussorgsky in 1939), province of Pskov, March 21, 1839; died in St. Petersburg, March 28, 1881

When Viktor Hartmann, an artist, designer and sculptor, died of a heart attack in 1873, his close friend Modest Mussorgsky was devastated. Mussorgsky was further plagued with guilt feelings, recalling that, had he run for a doctor rather than trying to comfort the stricken Hartmann, the artist might have lived. Mussorgsky slipped into depression, aggravated by his alcohol problem.

Vladimir Stassov, a music critic and friend of both Mussorgsky and Hartmann, arranged an exhibit of about four hundred works of the deceased artist, hoping that this tribute might in some way relieve Mussorgsky's depression. The exhibition opened in January, 1874 at the St. Petersburg Society of Architects. Thanks to Stassov, Mussorgsky was inspired to create a suite of ten musical portraits for piano, his only significant work for this instrument. The entire set was written in a single burst of creative energy during June of 1874. The music was not published until 1886, and did not achieve popularity in any form until Maurice Ravel orchestrated it in 1922 at the request of conductor Serge Koussevitzky. The first orchestral performance was given later the same year, conducted by Koussevitzky at the Paris Opéra. Since then, *Pictures* has become one of the most popular staples in the repertoire for orchestras and pianists alike. Nearly forty more orchestrations besides Ravel's are known to exist.

Each musical portrait is based on one of Hartmann's paintings. A "Promenade" theme opens an imaginary stroll through the picture gallery, a theme that returns several times throughout the work as the viewer moves on to another painting or group of paintings. These paintings are:

Gnomus – A child's toy made of wood, styled after a small, grotesque gnome with gnarled legs and erratic hopping movements. **The Old Castle** – A watercolor of a troubadour singing in front of a medieval castle. **Tuileries** – A lively picture of children scampering about, engaged in horseplay while their nannies chatter. **Bydlo** – On giant, lumbering wheels, an oxcart comes into view, its driver singing a folk song in the Aeolian mode. **Ballet of the Unhatched Chicks** – Cheeping baby canaries dance about, wings and legs protruding from their shells. **Samuel Goldenberg and Schmuyle** – Mussorgsky called this piece "Two Polish Jews, Rich and Poor." Their personalities are vividly drawn. **The Marketplace at Limoges** – Another lively, bustling, French scene. Here, rather than children, we find the rapid chatter, babble and arguments of housewives. **Catacombs** – Hartmann himself, lantern in hand, explores the subterranean passages of Paris. Eerie, ominous sounds are heard in the ensuing "**Cum mortuis in lingua mortua**" (With the dead in a dead language). To a distorted version of the Promenade theme, the music depicts a grisly sight. **Baba Yaga's Hut on Chicken Legs** – Mussorgsky portrays the fabled witch's ride through the air in her mortar, steering with a pestle. At the height of the dizzying ride, she seems to sail right out of this picture into the next. **The Great Gate at Kiev (Kyiv)** – This depicts Hartmann's architectural design for a gate (never built) to commemorate Alexander II's narrow escape from an assassination attempt in Kiev (Kyiv).

For a profile of Robert Markow, see page 30.

11/
20

Kazuhiro KOIZUMI

Honorary Conductor for Life

小泉和裕

終身名誉指揮者



©堀田力丸

東京藝術大学を経てベルリン芸術大学に学ぶ。1973年カラヤン国際指揮者コンクール第1位。これまでにベルリン・フィル、ウィーン・フィル、バイエルン放送響、ミュンヘン・フィル、フランス放送フィル、ロイヤル・フィル、シカゴ響、ボストン響、デトロイト響、シンシナティ響、トロント響、モントリオール響などへ客演。新日本フィル音楽監督（1975～79）、ウィニペグ響音楽監督（1983～89）、都響指揮者（1986～89）／首席指揮者（1995～98）／首席客演指揮者（1998～2008）／レジデント・コンダクター（2008～13）、九響首席指揮者（1989～96）／音楽監督（2013～24）、日本センチュリー響首席客演指揮者（1992～95）／首席指揮者（2003～08）／音楽監督（2008～13）、仙台フィル首席客演指揮者（2006～18）、名古屋フィル音楽監督（2016～23）などを歴任。2021年12月、自身の半生をつづった『邂逅の紡ぐハーモニー』（中経マイウェイ新書）が出版された。

現在、都響終身名誉指揮者、九響終身名誉音楽監督、名古屋フィル名誉音楽監督、神奈川フィル特別客演指揮者を務めている。

Kazuhiro Koizumi studied at Tokyo University of the Arts and at Universität der Künste Berlin. After winning the 1st prize at Karajan International Conducting Competition in 1973, he has appeared with Berliner Philharmoniker, Wiener Philharmoniker, Symphonieorchester des Bayerischen Rundfunks, Orchestre philharmonique de Radio France, Chicago Symphony, Boston Symphony, and Orchestre symphonique de Montréal, among others. Currently, he serves as Honorary Conductor for Life of TMSO, Honorary Music Director for Life of Kyushu Symphony, Honorary Music Director of Nagoya Philharmonic, and Special Guest Conductor of Kanagawa Philharmonic.

【シェーンベルク生誕150年記念】
[Schönberg 150]

B
Series

第1011回 定期演奏会Bシリーズ
Subscription Concert No.1011 B Series

サントリーホール

2024年 11月20日(水) 19:00開演
Wed. 20 November 2024, 19:00 at Suntory Hall

指揮 ● 小泉和裕 Kazuhiro KOIZUMI, Conductor
コンサートマスター ● 矢部達哉 Tatsuya YABE, Concertmaster

モーツァルト：ディヴェルティメント第17番 二長調
K.334 (320b) (43分)


Mozart: Divertimento No.17 in D Major, K.334 (320b)

- I Allegro
- II Thema mit Variationen: Andante
- III Menuetto
- IV Adagio
- V Menuetto
- VI Rondo: Allegro

休憩 / Intermission (20分)

シェーンベルク：交響詩《ペレアスとメリザンド》 op.5 (42分)
Schönberg: *Pelleas und Melisande*, op.5

主催：公益財団法人東京都交響楽団
後援：東京都、東京都教育委員会
シリーズ支援：明治安田生命保険相互会社

助成：
 文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
独立行政法人日本芸術文化振興会

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

モーツァルト： ディヴェルティメント第17番 二長調 K.334 (320b)

「ディヴェルティメント(divertimento)」は、イタリア語の動詞「divertire (楽しませる)」に由来する「気晴らし」や「娯楽」といった意味を持つ言葉で、とくにフランツ・ヨーゼフ・ハイドン(1732～1809)やヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756～91)らが活躍した古典派の時代にこの名を冠した多楽章形式の器楽曲が数多く作曲された。

「嬉遊曲(喜遊曲)」という訳語が想起させるような気軽に楽しめる作品の多い分野だが、必ずしも「軽い」娯楽音楽のみを指す言葉ではない点には注意が必要だろう。1750～80年頃のオーストリアにおいて「ディヴェルティメント」は、各パートを1人の奏者が担当するソロ編成の楽曲のタイトルとして広く用いられており、時には「ソナタ」の代わりに語としても使用されるなど、その用例にはかなりの幅があった。作曲の目的や楽器編成、楽章構成なども様々であり、モーツァルトも弦楽三重奏や弦楽四重奏、管楽合奏、管楽器と弦楽器の混合編成など、多彩な編成による「ディヴェルティメント」を遺している。

ディヴェルティメント第17番は、2本のホルンと弦楽4部(第1、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、バス)のために書かれた作品だ。働き口を得るべく意気揚々と出かけたマンハイム・パリ旅行(1777～79)で、期待した結果を得られなかったばかりか同行した母アンナ・マリア(1720～78)の死に直面し、さらにはアロイジア・ウェーバー(1760頃～1839 /後に妻となるコンスタンツェの姉)との失恋までも経験した若きモーツァルトは、1779年1月、失意のうちにザルツブルクに帰郷した。

以後、傷心の作曲家は翌1780年11月にミュンヘンへ向けて再び出発するまでの2年弱を故郷ザルツブルクで宮廷オルガン奏者として過ごすことになる。ディヴェルティメント第17番はちょうどこの頃、1779年または1780年の夏に書かれたと考えられている作品であり、同地の名門貴族ロービニヒ家の子息で、モーツァルトが親しみを込めて「ジージェル」と呼んでいた友人、ジークムント・ロービニヒ・フォン・ロッテンフェルト(1760～1823)のザルツブルク大学卒業(1780年7月)を祝うために、行進曲二長調K.445(320c)とあわせて演奏されたと推測されている。同時期に書かれた《戴冠式ミサ》K.317やヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲変ホ長調K.364、《ポストホルン・セレナード》二長調K.320などとともに、モーツァルトのザルツブルク時代最後の2年間を彩る名作のひとつである。

作品は6楽章構成。モーツァルトがザルツブルク時代に手掛けた他の管楽器と弦楽器のためのディヴェルティメントと同様に、メヌエット楽章を複数有するかたちで書かれている。

第1楽章 アレグロ ニ長調 第1ヴァイオリンが奏でる流麗な第1主題で幕を開けるソナタ形式楽章。しなやかに音階を上下する第1主題に対して、第2ヴァイオリンが提示する第2主題（イ長調）は、下行分散和音が印象的な弾むような旋律であり、まもなく第1ヴァイオリンによって軽やかに変奏される。

第2楽章 主題と変奏／アンダンテ ニ短調 主題と6つの変奏から成る変奏曲楽章。第1ヴァイオリンが主題を提示して始まり、3連符を中心とした第1変奏、リズムカルなオクターヴの動きに始まる第2変奏が続く。付点リズムが印象に残る第3変奏を経てたどり着く第4変奏は、ホルンの二重奏が朗らかに鳴り響くニ長調の変奏であり、よいアクセントになっている。第5変奏は再びニ短調に戻り、哀感を帯びた対話を繰り返す。そして最後は、第2ヴァイオリン以下の3声部が奏でるピッツィカート響きの中、第1ヴァイオリンが技巧的なパッセージを奏でる第6変奏となり、手短な終結部で静かに楽章を締めくくる。

第3楽章 メヌエット ニ長調 第1ヴァイオリンとヴィオラのユニゾンの調べで始まるメヌエット楽章。単に優雅なだけでなく、時折半音階的な翳りを帯びるところが魅力的だ。トリオは第1ヴァイオリンが颯爽と駆ける軽やかな音楽。モーツァルトのメヌエットの中でもとりわけ有名な楽章であり、しばしばヴァイオリンとピアノのための二重奏編曲版などでも演奏される。

第4楽章 アダージョ イ長調 抒情美あふれる緩徐楽章であり、楽章全体を通して弦楽器のみで演奏される。第1ヴァイオリンが歌う気品に満ちた第1主題と、第2ヴァイオリンとヴィオラの先導で始まるホ長調の第2主題を中心としたソナタ形式で構成されている。

第5楽章 メヌエット ニ長調 第3楽章とは対照的な快活で力強い主題に始まるメヌエット楽章。こちらはコントラストに富んだ2つのトリオを挟む構成で書かれている。

第6楽章 ロンド／アレグロ ニ長調 冒頭から登場する晴れやかな表情の主題を中心としたロンド形式楽章。第1ヴァイオリン・パートに、さながらヴァイオリン協奏曲の独奏パートであるかのような華麗な技巧が散りばめられた、華やかなフィナーレ楽章である。

(本田裕暉)

作曲年代：1779年夏または1780年夏

初演：不詳(1780年ザルツブルク?)

楽器編成：ホルン2、弦楽4部

シェーンベルク： 交響詩《ペレアスとメリザンド》 op.5

ベルギー出身の象徴派詩人モーリス・メーテルリンク(1862～1949)が1892年に発表した戯曲『ペレアスとメリザンド』は、多くの作曲家を魅了し、クロード・ドビュッシー(1862～1918)によって歌劇化されたほか、いくつもの楽曲に着想を与えることとなった。

アルノルト・シェーンベルク(1874～1951)は12音音楽の提唱者として知られるが、12音技法を考案したのは1920年代のことであり、若い頃は後期ロマン派的なスタイルの音楽を書いていた。交響詩《ペレアスとメリザンド》は、《浄められた夜》や《グレの歌》と並んで、後期ロマン派時代の彼を代表する大作である。

あるとき、シェーンベルクはリヒャルト・シュトラウス(1864～1949)から、『ペレアスとメリザンド』に基づく歌劇を書くことを勧められた。ドビュッシーが既に歌劇を作曲していたことを2人は知らなかったが、シェーンベルクは歌劇ではなく交響詩の形態を採用し、その中で原作の物語を仔細にたどることにした。

この長大な交響詩は全体として自由なソナタ形式を採ると同時に、展開部に相当する箇所にはスケルツォと緩徐楽章にあたるエピソードが挿入されて、4楽章形式の交響曲としての体裁をも備えている。また戯曲の登場人物やテーマを表す諸動機が設定されていて、それらの発展によって物語の展開が暗示される。

第1部(以下の区分は便宜的なもので、スコアには明記されていない)は「森」を表す緩やかな序奏に始まる。その模糊とした雰囲気の切れ目に顔を出すバスクラリネットによる短い「運命」の動機は曲の展開上重要である。やがてオーボエに「メリザンド」の主題が登場し、それを追うようにホルンが「ゴロー」の主題を奏して2人の出会いを描いた後、主部に突入する。弦楽器に登場する第1主題は「ゴロー」の主題から派生したものであり、その後トランペットによって軽やかに歌われつつ導入される第2主題は「ペレアス」を示す。展開部に入り、「メリザンド」の主題が立ち戻ると、クラリネットに印象的な上行音形が現れるが、これはペレアスとメリザンドの間の「愛の目覚め」の動機とされる。

スケルツォに相当する**第2部**は、泉のほとりで戯れるペレアスとメリザンドを描く。テンポが落ちると3人の登場人物の主題が絡み合っ、塔の上と下に分かれてペレアスとメリザンドが言葉を交わす場面を描写する。その後スケルツォ主部の動きが微かに戻ると、低音楽器の特殊な音色がもたらす不気味な雰囲気と共に、ペレアスとゴローが城の地下に降りていく場面が描かれる。

「愛の目覚め」の動機に基づく推移部を経て、音楽は緩徐楽章にあたる**第3部**に入り、泉のほとりでのペレアスとメリザンドの待ち合わせから愛の告白、ペレアス

の死までを描く。諸主題が絡み合う中、長大でロマンティックな主題が2人の愛を歌い上げるが、高揚の果てにゴローが乱入し、ペレアスを刺し殺してしまう。

ホルンが途切れ途切れに「ペレアス」の主題を歌い、木管楽器が「メリザンド」の主題を静かに歌うと、音楽はソナタ形式の再現部にあたり、メリザンドの死を描く**第4部**へと移行する。序奏の雰囲気は回帰した後、ここまでの主要主題が回想されていくが、多くの主題は変容を受けたり、他の動機と結合されたりして、原形をとどめない。最後に「運命」の動機と「ゴロー」の主題が回想され、全曲は静かに幕を閉じる。

(相場ひろ)

作曲年代：1902年7月～1903年2月

初演：1905年1月26日 ウィーン 作曲者指揮 ウィーン演奏協会管弦楽団

楽器編成：ピッコロ、フルート3 (第3はピッコロ持替)、オーボエ3 (第3はイングリッシュホルン持替)、イングリッシュホルン、小クラリネット、クラリネット3 (第3はバスクラリネット持替)、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン8、トランペット4、トロンボーン5、チューバ、ティンパニ、トライアングル、シンバル、大太鼓、中太鼓、タムタム、ブロッケンシュピール、ハープ2、弦楽5部

Program notes by Robert Markow

Mozart: Divertimento No.17 in D Major, K.334 (320b)

- I Allegro**
- II Thema mit Variationen: Andante**
- III Menuetto**
- IV Adagio**
- V Menuetto**
- VI Rondo: Allegro**

Wolfgang Amadeus Mozart: Born in Salzburg, January 27, 1756; died in Vienna, December 5, 1791

Aside from a group of five divertimentos for three basset horns (1782) and the great Divertimento K. 563 for string trio (1788), the work we hear at this concert is the last Mozart entitled “divertimento.” After leaving Salzburg, embittered over the lack of recognition accorded him there, Mozart attempted to make his name in Vienna mostly through the media of the piano concerto and opera. Hence, he had little need of serenades, divertimentos, cassations and similar works – “social music” as it has come to be called – designed for functions like a garden party, a reception, or a formal dinner.

“A divertimento,” writes Mozart scholar Neal Zaslaw, “as its name would suggest, is music of a diverting sort – entertainment music. It is usually said (questionably, in my opinion) to be of a lighter character than “serious” genres such as sonata, string quartet, etc. But as so much of Mozart’s other music is diverting, and as his divertimentos contain so much serious artistic content, the distinction would seem to be a dubious one.” The latter remark is particularly appropriate in assessing Divertimento K. 334, whose scale, sweep, depth of expression and level of virtuosity demanded from the solo violin all help push this work into the masterpiece category. An earlier Mozart scholar, Alfred Einstein, called its movements “among the purest, gayest, most satisfying and most perfect that ever assumed musical form … a lost paradise in music.”

The Divertimento K. 334 was composed probably in the summer of 1779 for a garden party at the home of the aristocratic Robinig family in Salzburg to mark the end of young Siegmund’s studies at Salzburg University. Although originally conceived as chamber music (one player per part), it has become common practice to offer it with a full string ensemble. Mozart’s first violinist at the Robinig affair must have been quite an accomplished musician, for the part requires the utmost dexterity, ascends to the highest register, and commands the limelight throughout much of the work.

A sonata-form first movement and a lively rondo-finale set to a “hunting”

rhythm frame four inner movements in a double sequence of slow movement and *Menuetto*. The first of the slow movements presents a theme with six variations, the theme being a minor-key version of the song “Hoch soll er leben.” The emotional centerpiece of the Divertimento is the eloquent *Adagio*, where remote harmonic regions, chromaticism and an expressive warmth beyond the normal scope of a “divertimento” all leave strong impressions. But the movement most likely to bring smiles of recognition to its listeners is the first *Menuetto*, which has earned itself an independent existence as one of Mozart’s most famous pieces.

Schoenberg: *Pelleas und Melisande*, op.5

Arnold Schoenberg: Born in Vienna, September 13, 1874; died in Los Angeles, July 13, 1951

In April of 1902, the 27-year-old Arnold Schoenberg met Richard Strauss in Berlin. Strauss was highly impressed with Schoenberg’s talent, and arranged both a stipend and a teaching position for his younger colleague. Strauss also drew Schoenberg’s attention to the drama *Pelléas et Mélisande* by the Belgian playwright Maurice Maeterlinck. First produced in Paris in 1893, the play had also served as the subject for a well-publicized opera by Debussy, which received its premiere in the same city nine years later. Strauss encouraged Schoenberg to write his own opera on the subject. Schoenberg decided on a symphonic poem instead. Schoenberg began writing this long (forty minutes), complex work in July of 1902 and completed it the following February. The premiere was given in Vienna on January 26, 1905 with the composer conducting an orchestra assembled under the banner of the Vienna Society of Creative Musicians.

The plot concerns a classic love triangle, and is a variant of the Tristan and Isolde story. Young Melisande is discovered lost in the forest by Golaud, an older man. He escorts her back to his castle and they marry soon afterwards. But Golaud proves to be an unsatisfactory husband, and when Melisande meets the youthful Pelleas, they fall in love. Golaud suspects their affair and plots to catch them in a compromising situation. This he does, and kills his adversary. Melisande dies soon afterwards in childbirth, leaving Golaud torn with uncertainty as to the identity of the infant’s father.

As *Pelleas und Melisande* is one of Schoenberg’s earliest works, it is still rooted in tonality, though its tortuous chromaticism, dense polyphony and heightened chromaticism – all strongly influenced by Wagner’s opera *Tristan und Isolde* – indicate the direction Schoenberg’s music was eventually to take. Further resemblance to *Tristan* can be seen in its themes of fate and of love fulfilled only in death. The extensive use of *Leitmotifs* is also Wagnerian. Alban Berg’s thematic analysis lists twenty motifs, though only a handful are of prime importance. These

are developed in multifarious ways, surrounded with countersubjects and enmeshed in dense webs of plush sound.

Pelleas und Melisande is, like all symphonic poems, laid out in one continuous movement, though in this case it can be subdivided into four parts roughly corresponding to movements of a symphony.

Part I opens with dark murmurings, surely representing the gloomy forest in which Melisande is wandering. In close succession we hear the motifs of fate (twice in the bass clarinet alone in the opening bars), Melisande (a plaintive, descending idea in the oboe) and Golaud (at first softly in the horns, then more prominently with cellos and horns combined). Pelleas' motif is delayed until sometime later, played first by the solo trumpet and described by Schoenberg as "youthful and knightly."

Part II begins with a scherzo. Melisande, now living at Golaud's castle, is outdoors by the fountain, casually tossing her wedding ring up and down. The play of sunlight on the ring, the splashing of the water, and the rustle of woodland trees are masterfully depicted in the orchestra. This scene is rudely interrupted as Melisande drops the ring down the well at the very moment Golaud's horse stumbles and throws him to the ground somewhere out in the forest. These concurrent events are graphically illustrated by trombones and tuba. A bit later, in a passage of exquisite beauty, Melisande stands in the castle tower playing with her magnificent long hair (flutes, clarinets and harps intertwined). Pelleas comes calling, and she "accidentally" lets her hair fall to envelope the ecstatic wooer. Golaud takes Pelleas to visit the dark, dank vaults below the castle, a dismal scene in which, for the first time in the history of orchestration, trombones are asked to produce *glissandos* (slides).

Part III, the equivalent of a symphony's slow movement, is one long love scene dominated by one of the warmest, most romantic, most sensuously beautiful themes in any composer's catalogue. The series of ever more impassioned climaxes bears comparison with those in Act II of Wagner's *Tristan*. Also as in that opera, the magical, otherworldly mood is rudely broken by the intrusion of the jealous third party (Golaud), who kills his rival on the spot.

Part IV serves mostly as a recapitulation of previous events, beginning with the brooding forest music. Following a climax of awesome contrapuntal complexity comes the eerie processional of castle servants as they await Melisande's death, followed by a noble epilogue featuring the motifs of Golaud, Pelleas and Melisande (the latter two richly intertwined) which works itself into one final, impassioned climax. Melisande's consciousness slowly fades as the fate motif sets the seal of finality on this sad story.

Robert Markow's musical career began as a horn player in the Montreal Symphony Orchestra. He now writes program notes for orchestras and concert organizations in the USA, Canada, and several countries in Asia. As a journalist he covers the music scenes across North America, Europe, and Asian countries, especially Japan. At Montreal's McGill University he lectured on music for over 25 years.